

The Red Pony の死と生

田 中 育 造

はじめに

Steinbeck が California にすみ、そこを舞台にかいたほとんどすべての作品にわたって基調になっているのは生命への礼賛である。小論では、それがもっとも単純・明瞭なかたちであらわれている *The Red Pony* を分析して、Steinbeck の生命観をさぐってみようとおもう。

1

The Red Pony は “The Gift”, “The Great Mountains”, “The Promise”, “The Leader of the People” の四つの短編からなる。はじめ “The Gift” と “The Great Mountains” は1933年11月と12月に *North American* に, “The Promise” は1937年10月に *Harper's* にそれぞれ発表され⁽¹⁾, 1937年にこの三つからなる *The Red Pony* が出版された。“The Leader of the People” は1938年出版の短編集 *The Long Valley* にはいつている。この *The Long Valley* には “*The Red Pony*” の題のもとに上記はじめの三編も収録されているが、1945年に四編からなる *The Red Pony* が出版された。以下1945年版によって論をすすめることにする。

2

Warren French は *The Red Pony* のテーマを Jody 少年のおとなへの成長過程であるとし, “The Gift” では “the fallibility of man” を, “The Great Mountains” は “the wearing of man” を, “The Promise” は “the unreliability of man” を, “The Leader of the People” は “the exhaustion of nature” をそれぞれえがきだしているといっている⁽²⁾。たしかに表面的にはそのようによみとれる。Steinbeck 自身もこの作品をかいた動機をつぎのようにいつている。

The first death had occurred. And the family, which every child believes to be immortal was shattered. Perhaps this is the first adulthood of any man or woman. The first tortured question “Why?” and

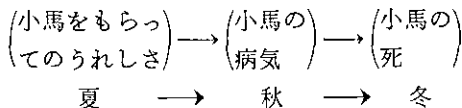
then acceptance, and then the child becomes a man. *The Red Pony* was an attempt, an experiment if you wish, to set down this loss and acceptance and growth.⁽³⁾

しかし、のちにのべるようにしてこの作品の構成をみていくと、French の考えるように人間の可能性の否定的な面をえがきあげているとはおもわれな

い。Peter Lisca はこの作品の “a continuity of theme” は “the education of a young boy” であるとし、はじめの三つの物語では自然をとおしての、最後の物語は “sense of the past” をあらわす Jody 少年の祖父をとおしての教育であり、はじめの三つの物語の “central experience” は死——子馬と Gitano 老人と母馬——であると分析する⁽⁴⁾。たしかにこの四つの物語の中心は Jody 少年がなにかをしることであり、はじめの三つの物語では死が大きくあつかわれている。それでは少年はなにをし、この死はなにを意味するのか。物語をひとつずつたどってそのことを考えてみることにしよう。

3

“The Gift”——Jody 少年はおもいがけなく小馬をもらう。小馬は成長するにつれて少年によくあつてつき調教してみるとすばらしい素質をもっている。しかしある日おもわぬ雨にぬれてかぜをひき、悪化し、あらゆるあてのきいもなく死んでゆく。ここで Jody は小馬の死をとおして死というものを、しかも自分の身に密接に関係しているものの死を、はじめてまのあたりにみることになる。いわば死を実感するのである。Jody にとってこの死はさらにもうひとつのことをおしえる。それはこの小馬のあてをするのが Jody の家の牧場にやとわれているひとで、馬のことに關してはこのあたりでならぶものがないでもつ Billy という男なのだが、Jody が絶対にまちがいをしないと信じていたその Billy よりも、すなわち人間よりもはるかに大きな力をもつなにかがあるということである。その力に対する生命のたよりなさである。以上のようにこの物語のテーマは〔生→死〕であり、生命のたよりなさである。それをあらわすための構成はつぎのような非常に単純なかたちでできている。



The Red Pony の死と生

晴	→	雨	→	あらし
明		→		暗
<hr/>				
生		→		死

二三の例をあげると、

The sun was coming over the ridge now, glaring on the whitewash of the houses and barns, making the wet grass blaze softly.

ふとそのとき、

Over the hillside two big black buzzards sailed low to the ground and their shadows slipped smoothly and quickly ahead of them.⁽⁵⁾
buzzards はのちに小馬の死骸をついばむことになる。

he hurried home through the dark rain.……The red coat was almost black, and streaked with water.⁽⁶⁾ and he saw Gabilan weakly shambling away into the darkness,⁽⁷⁾

雨が小馬 Gabilan の死の原因である。そして最後の場面で、小馬の死骸をついばんでいるはげたかのむれのなかにおどりこんでいて、にげおくれた1羽をつかまえ、それが小馬をころしたのではないことを十分しってはいてもむなしくたたきのめす Jody のすがたにこのテーマがあざやかに凝結される。

4

“The Great Mountains”——ある日牧場にひとりの老人があらわれる。そしていうことには、自分はこのあたりでうまれそだったものである。死期もちかいいま、ここで余生をおくりたい。かるい仕事ならできるからおいてもらえないかというのである。しかし結局はことわれ、翌朝これももうとしおいてやくにたたなくなったこの牧場の馬にのって、大連峰めざしてさってゆく。

ここでは Jody 少年は老人をとおして老ということをする。生のはかなさをするのである。このテーマは表題の The Great Mountains によってあらわされる。牧場は西の山々と東の山々とのあいだにある。西の山は

so impersonal and aloof that their very imperturbability was a threat
である。それに対して東の山は

jolly mountains, with hill ranches in their creases, and with pine

trees growing on the crests⁽⁸⁾

である。すなわち Jody 少年は西の山——死と東の山——生のあいだにすんでいるのである。少年は西の山のことがしりたくていろいろと両親にたずねてみるのだが、だれもはっきりとはこたえられない。あの山へいってきたことのあるひとはないのである。そこで少年はこの老人にきいてみるのだが、はっきりこたえてはくれない。しかしただひとこと、

“I think it was quiet—I think it was nice.”⁽⁹⁾

とこたえる。老人は老馬——かつては競馬にできればいつでもきっと 200 ドルの賞金をえることができたほどの名馬——にまたがって西の山をさしてさってゆく。手には老人の唯一の財産である剣（過去の栄光）がにぎられているのを少年はみる。ここでもまた明と暗の対照がみられる。東西の山のあいだにある少年の家は

The foothill cup of the home ranch below him was sunny and safe.

The house gleamed with white light.⁽¹⁰⁾

であり、西の山は

they went piling back, growing darker and more savage.⁽¹¹⁾

である。さらに老人の顔は

And his face was as dark as dried beef.⁽¹²⁾

とえがかれる。

5

“The Promise”——Jody はふたたび小馬をもらうことになる。しかし今度はたねをもらいにいくことから始めて、出産までの母馬の世話を一切 Jody がしなければならぬ約束である。少年は熱心にその仕事をし、ついに出産のときをむかえる。しかし難産で、Billy はやむなく母馬をころして小馬をとりあげる。

ここで少年がするのは生のきびしさである。お産まじかな母馬を心配して夜中にねどこをぬけ、納屋に様子をみにきた Jody は、馬につきそっている Billy にどなられる。

“She’s got enough to do without you worrying her.”⁽¹³⁾

そして

He tried to be glad because of the colt, but the bloody face, and the haunted, tired eyes of Billy Buck hung in the air ahead of him.⁽¹⁴⁾

しかし、ここにいたってはじめて Jody は生をえるのである。それは “The Gift” におけるような、おくりものとしての、夢のような生ではなく、自分自身実際に生命誕生までのあらゆる過程に参加することによってなのである。事実 “The Gift” では小馬の生はやすやすとうしなわれてしまった。「生命の最も本質的な特性は Active Maintenance of Normal and Specific Structure⁽¹⁵⁾」であるように、それをえるのにもまた active でなければならぬというのである。テーマはここで死から生へと転換する。

生と死をあらわす明と暗との対照はこの物語では泉の水といとすぎによってしめされる。牧場の丘には泉があって、水はいつでもあふれ、あたりは緑がきえることがない。ここにすれば Jody はいつもころなぐさめられる。それに反して黒いといとすぎの木はぶたを屠殺するところであってひとをよせつけない。

The water-tub and the black cypress were opposites and enemies.⁽¹⁶⁾
Jody はうまれくる小馬のことを考えている丁度その瞬間このいとすぎの下をとおっているのにきがつき、あわてて緑の原へゆき水の音にききいる。またこの物語は

The afternoon was green and gold with spring.⁽¹⁷⁾
という光にあふれた場面にはじまり、

Then Jody turned and trotted out of the barn into the dawn.⁽¹⁸⁾
と、くらい納屋からあかつきのなかにでるところでおわっている。

6

“The Leader of the People”——Jody の母方の祖父があそびにくる。少年はひとがくるので単純によるこんでいるが、父親はにがいおをする。それは祖父がひとをひきつれて大陸をよこぎったときはなしを、しかもいままで何度もしたはなしをまたきつとするからである。やはりそのとおりになった。翌朝祖父がまだ食事にこないとき、父親はうんざりしている気持ちをこらえきれずにくちにだしてしまふ。それを祖父はきいてしまうのである。

ここではいままでの三つの物語とはちがって直接死はとりあげられない。ここにえがかれているのはひとつの時代の終焉である。世代間の断絶である。しかし、たしかに祖父たちのおこなつたことはふたたびくりかえすことはできない。それでもなお祖父がむかしのはなしをくりかえすのは、西へいくこと、すなわち人間がつねにすすんできたということ、それもひとりです。

はなくてひとかたまりになって、そのかたまりがひとつのいきものとなってすすんでいったのだということに意義をみとめてほしいからである。むかしのはなしを単にきいてもらいたいのではなく、そのなかにあるところを感じてもらい、うけついでてもらいたいからなのだと言父はいう。Jody がするのは、というよりも、ここではむしろ Jody にしてもらいたいことといった方が適当であるが、それは生の連続の困難さであり、同時に生の連帯の重要性である。これまでの三つの物語では自然的な死と生をテーマとしてきたのに対し、ここでは人間的な生がテーマとなっている。自然的な死から生へというたていとおりになされる人間的な生というよこいとである。構成の上でも、さきの三つの物語にみられた生死をあらわす明暗の対照はここにはみられない。このような点から考えると、たしかに稲沢秀夫『スタインベック論』にいうように、この物語は「前三部の純粋な続篇とするには多少無理」があり、このテーマは *The Red Pony* の「主調とは異質のものである⁽¹⁹⁾。」しかし、1945年版から *The Red Pony* の一部としてこの一編をくわえたのは、単に Jody 少年が登場し、舞台もおなじ少年の牧場であるためばかりではもちろんなく、自然的な生に人間的な生、生の連帯連続という Steinbeck のもうひとつのテーマをくわえることによってその生命観を一層完全なものにしようとしたのではないかと考えたい。生の連帯連続という生命観はすでに *In Dubious Battle* (1936年) にもみえているが⁽²⁰⁾、*The Grapes of Wrath* (1939年) や *The Moon is Down* (1942年) にはっきりとあらわれてくる⁽²¹⁾。Hemingway が *To Have and Have Not* (1937年) で Harry Morgan に “No matter how a man alone ain't got no bloody chance”⁽²²⁾ といわせ、“any mans death diminishes me, because I am involved in Mankind” という John Donne の詩を冒頭にかかげる *For Whom the Bell Tolls* (1940年) では Robert Jordan に “If we win here we will win everywhere”⁽²³⁾ という確信をあたえたのもスペイン戦争から第二次世界大戦にいたるこの時期であるということをも考えあわせていいのではないか。

む す び

以上みてきたように、四つの物語はそれぞれひとつのテーマをもった独立した作品であるが、それを *The Red Pony* というひとつの作品としてよみすすんでくると、さらに大きなひとつのテーマのもとに発展しながらがれているのがわかる。それは死から生への過程である。その生は、あたえられ

る生ではなく得る生であり、自然的な生からでて人間的な生にいたる過程であり、連帯と連続の可能性をもった生である。

このような生命観は California 時代の Steinbeck のほかのほとんどすべての作品の基調になっている pattern でもある。おわれゆく農民のすがたをえがき、社会の矛盾をあばいた作品のようにみえる *The Grapes of Wrath* であっても同様である。あまりにもしばしば引用される例であるが、国道をのろのろとしかしたえずあるきつづけるかめの象徴的挿入とか、20章、26章にみられる母親と Tom のことばの中に、そしてなによりも、最後のところで、死産したむすめが餓死寸前のみしらぬ男に乳房をあてる場面にもっともよくあらわれている。さらに、生はそれ自身で善なのであり、生をおびやかすものは悪であるとして、原罪からの人間の解放をえがいた *East of Eden* (1952年) で Steinbeck はこのテーマの一応の総決算とするのである⁽²¹⁾。

注

- (1) Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck*, New Brunswick, New Jersey: Rutgers Univ. Press, 1958, p. 93.
- (2) Warren French, *John Steinbeck*, N. Y.: Twayne Publishers, 1961, p. 94.
- (3) John Steinbeck, "My Short Novels" (E. W. Tedlock, Jr., C. V. Wicker ed., *Steinbeck and His Critics*, Albuquerque: Univ. of New Mexico Press, 1957, p. 38.
- (4) Peter Lisca, pp. 100-107.
- (5) *The Red Pony*, N. Y.: Bantam Books, 1955, p. 6.
- (6) *ibid.*, p. 22.
- (7) *ibid.*, p. 30.
- (8) *ibid.*, p. 39.
- (9) *ibid.*, p. 44.
- (10) *ibid.*, p. 39.
- (11) *ibid.*, p. 38.
- (12) *ibid.*, p. 40.
- (13) *ibid.*, p. 69.
- (14) *ibid.*, p. 73.
- (15) 江上不二夫『生命を探る』岩波新書, 1967, p. 16. イタリアック田中。
- (16) *The Red Pony*, p. 63.
- (17) *ibid.*, p. 52.
- (18) *ibid.*, p. 73.
- (19) 稲沢秀夫『スタインベック論』思潮社, 1967, pp. 169-71.
- (20) 8章の Mac と Dr. Burton の会話。
- (21) *The Grapes of Wrath* 28章母親と Tom の会話, *The Moon is Down* 5章の Tonder のことば "Flies conquer the flypaper".
- (22) *To Have and Have Not*, Penguin Books 1955年版, p. 178.
- (23) *For Whom the Bell Tolls*, Penguin Books 1955年版, p. 440.

The Red Pony の死と生

(24) "Nearly everything I have is in it" N. Y. : Bantam Books, 1955年版, *East of Eden*, Dedication to Pascal Covici.

最後にひとことつけくわえておかなくてはならないのだが、このような生命原理も Steinbeck の最近のベトナム戦争報告（毎日新聞、1967年3月）をよむと、まったくむなしいものとなっている。アメリカ空軍のばらまくナバーム弾のしたをにげまどうベトナム人民の生命は Steinbeck の目には全然うつることがなかったからである。たとえきびしい検閲があるにしても、アメリカ軍のヘリコプターの操縦のうまさ后感嘆するのではなく、民衆のくるしみをみる目にこそ作家としてのいのちがあるはずなのだから。

The latter half (5-8) is devoted to the study of images of the Jewish relationship to the Christian world. Representations of the Jews' sufferings, of their exiles, of Shapiro's views of Christian churches, and of his social criticism are taken up.

Death and Life of *The Red Pony*

Ikuzo TANAKA

Studying Steinbeck's works which were written in California, we detect one major motif: glorification of life. To study his view of life, I have selected *The Red Pony*, which, I think, indicates the motif most simply and clearly. *The Red Pony* consists of four stories. Each of them has its own theme and together they make up one design. I have tried to see each theme and the relationships.

Two Aspects of *The Winter's Tale*

Shozo TAKAHASHI

There are two aspects in life. One is the aspect of darkness and the other brightness. In this play, these are well matched and each individually developed in the various experiences of life.

Leontes' jealousy, representing the greatest problem of the human mind, shows the aspect of darkness. In his malice, we find some much significance, such as Sin and Death, and Nothing and Justice. The symbolism of Perdita, Hermione's grace, and Autolycus' humour show aspects of brightness, such as love unchangeable in distress, purity and sincerity of human nature, and a firm determination to overcome human vices.

In this play, Shakespeare shows the most malicious mind and despicable deeds, and at the same time he skillfully describes the most graceful.

Studies in the Refraction Found in New Testament Translations

Kunio KATO

Presupposing the necessity of thorough study of the Old Testament, the writer tries to find 'refraction' in such as Latin, French, German, and English.

Then reading through the Syriac Version, (the Peshitta,) the writer